



## 伊勢街道と神明神社

東海道の日永の追分(四日市市)から分岐して伊勢に向かう伊勢街道は、江戸時代に伊勢神宮への参宮街道として大変にぎわいました。この街道は、市内では河芸町東千里から南下し、津城下を通過して現在の雲出島貫町へと至ります。街道沿いの各地には、今も当時の面影が残されており、今回は橋南地区周辺をご紹介します。

岩田橋を渡り、現在の国道23号と重複する伊勢街道は、岩田交差点を越えたところで南東方向に折れ、真教寺や市杵島姫神社の並ぶ交差点へと至ります。「えんま堂」の別名で知られる真教寺は、津藩の二代藩主・藤堂高次によって建立された寺院です。当時はこの辺りが津城下の南の端であったことから、町の守護として寺院が建てられたと伝えられています。

街道は真教寺と市杵島姫神社のある交差点から再びまっすぐ南へと進みます。阿漕町津興から八幡町へかけての街道沿いは、明暦(1655~57年)の頃になると藩が町づくりに力を入れ、茶店や商店が増えたようです。現在も、旧街道の道沿いには格子などが残る建物が並んでいます。

真教寺から130mほど南に進んだ場所に、鳥居と説明板が目目を引く神明神社があります。この神社は江戸時代の絵図で「一万度祓納社」として描かれています。説明板によると、悪病が流行して町中がとても苦しんだ時に、人々が相談して阿漕町の中心部に神社を祭り祈祷したところ、病が治まったことから、町の守護として信仰を集めるようになり、毎年4月8日に大祭が催されるようになったとのこと。珍しいことに、祭神は屋根に作られた天窓の上に祭られていて、地元では「まんどさん」と呼ばれています。また、神明神社からさらに150mほど南に進んだ交差点の辺りは、江戸時代には安濃郡と一志郡の境とされていたようです。

街道沿いには神社や寺院、石造物などが残されていますので、往時の雰囲気を感じながら散策を楽しんでみてはいかがでしょうか。



真教寺(左)と市杵島姫神社(右)



神明神社の鳥居

